



第3部 ②

茶道

伊達政宗は茶道に通じた有数の戦国武将だった。古田織部や小堀遠州といった著名な茶人と親交をもち、茶会をたびたび開いた。

茶にまつわるエピソードも多い。1590年(天正18年)、政宗は豊臣秀吉から何度も督促があったにもかかわらず、北条氏を征伐するための小田原参陣が遅れ、怒った秀吉から近郊での滞在を命じられた。数日後、政宗のもとに使者が派遣され詰問が行われ

所作の想定のみ主藩

だが、これが終わると政宗は使者に対し「千利休に茶湯の話を伺いたい」と、面会を求めたという。茶を愛した秀吉はこの話を聞き、「田舎で暮らしているのに奇なことだ。命も危うい時にこのような申し出をするとは」と、政宗の器量を褒めて拝謁を許した。秀吉は陣所で茶をたてて、政宗に振る舞った。

「政宗公は茶の湯によって命を救われたわけです。ほほ笑みながらこう話すのは大泉道鑑さん(75)。「仙台藩茶道石州流清水派」宗家の十一世家元だ。政宗は、古田織部の高弟・清水道閑を、京都から仙台藩の初代の茶道頭(茶道師範)に招聘した。清水派の祖である。

その後、徳川將軍家の茶



江戸時代から変わらない「藩主のお茶」をたてる守屋さん(22日、仙台市若林区で)

道師範で、茶道の規格を定めた片桐石見守(石州)が創始した石州流茶道が仙台藩にも取り入れられる。

2代藩主・忠宗の命で二世動閑は石州の下で修業を積んだ後、茶道頭に任ぜられた。「將軍家お抱えの茶道を取り入れるのは、数ある大名の中でも仙台藩は別格である」と内外に示す思惑もあったのでしよう」と大泉さんは分析する。

政宗、忠宗以降の藩主も茶道には強い関心を示した。仙台市博物館には、政宗や歴代藩主が作った茶杓が所蔵されている。一説には、質の高い和菓子店が仙台市内に多いのは、茶道が広く浸透した影響ともいわれる。

同市若林区清水小路にある大泉さんの茶室。30〜80歳代の約20人の弟子が稽古に通う。20年近く通っている守屋道美さん(58)は、「稽

古に集中していると、日常の悩みから離れることができず」と話す。

仙台藩茶道石州流清水派の特徴は、戦国時代の名残か、お辞儀の際は手のひらを畳につけず、膝の横に握り拳をつくる。飲む際は茶わんを回さず、正面に口をつける。「飲む人は藩主だけを想定した『大名茶』なので、他の人に茶わんを渡さないのです」と大泉さん。流儀や所作は、4代藩主・綱村の頃に三世道竿が流派を確立して以来、変わることなく今に伝わ

大泉さんは毎年5月、政宗が眠る瑞鳳殿(仙台市青葉区)での遠忌法要で献茶を続けている。「生誕450年の今年、感謝の念はひとしおでした。政宗公は桃山文化を仙台へ入れ、洗練された『伊達文化』を作った恩人ですから」